

藤原 郁三（ふじわら いくぞう）

〔陶壁〕

昭和 21(1946)年 7 月 1 日生 （満 78 歳）

益子町在住

氏は、東京藝術大学美術学部日本画科を卒業後、河合紀氏の陶房に入り、陶板レリーフの技術を深く学ばれ、独立後に益子町で陶板レリーフの制作を始められました。昭和 58（1983）年に「藤原郁三陶房」を設立され、独自の技術や技法を駆使したオリジナルの陶壁や陶板タイルを生み出すとともに、この技法を用いて、芸術性の高い作品群「陶彫邪鬼」を制作されています。

氏は、県内の公共施設の陶壁を手がけられ、約 400 箇所設置されているほか、全国の建築物に陶壁やモニュメントが 300 箇所以上設置されるなど、氏の名声と共に本県が誇る「益子焼」の魅力を全国に発信されています。

また、地元益子町においては、ほぼ全ての公共施設に作品が設置され、文化的空間の形成に寄与されているほか、平成 19（2007）年の栃木県庁舎の建て替えの際には、多くの窯元が協力し、オール益子での陶壁制作を指揮されるなど、新たな形で益子焼の発展に貢献されました。

さらに、文化芸術や建築分野で大学の講師や審査員を務められるなど、若手芸術家の育成・指導に尽力されているほか、益子陶芸展（国際陶芸展）の立ち上げに尽力し、益子焼を世界に広める活動において大きな役割を果たされています。

近年では、蛍光管廃ガラスを再利用した「蛍硝子」を開発され、県内外の建築物に広く使われるなど、環境素材として高い評価を受けています。